

短大生の居場所概念と居場所感に関する調査

A study of the concept and sense of belonging among junior college students

上田 智子
Tomoko Ueda

藤林 清仁
Kiyohito Fujibayashi

西川 三恵子
Mieko Nishikawa

〈摘要〉

本研究では短大生 256 名を対象に、家族・友人・仲間・外部の 4 つの関係性ごとの「自己有用感」「本来感」から成る居場所感尺度と、学内での具体的場所や体験の「直接的居場所」について調査を行った。短大生の居場所感は大学生と比べても妥当かつ同じ構成で、家族に対して約 6 割、友人や仲間に対して約 3 割程度の居場所感を持ち、男女間の差はなかった。具体的居場所では図書館が最も多く、研究室、4 号館の順であった。短大の居場所の特徴として研究室の位置づけが高いことが確認され、大学祭が体験的居場所として上位に挙がっていた。

〈キーワード〉 居場所感 尺度 短大

I. 諸言

近年、「居場所がない」とか「心の居場所」という言葉が使われるようになった。本来、居場所とは「いるところ、いどころ（広辞苑）」とあるように、まさしく居る場所のことであるが、核家族化や地域コミュニティの崩壊による人間関係の希薄化や、個人情報保護法が制定され個人を過剰に尊重する風潮もあり、人との繋がりそのものが難しい社会となりつつあるため、単なる場所というより安心して居られる、心の拠り所というような意味で用いられることが多い。石本（2009）によると、以前はいわゆる不登校児童に対する心の居場所という心理的用語として使われていたが、1992 年文部科学省報告書『登校拒否（不登校）問題について－児童生徒の「心の居場所」作りを目指して（学校不適応対策調査研究協力者会議）』において学校が心の居場所として役割を果たす必要性が提唱され、1995 年以降新聞紙上で「居場所」「居場所がない」という表現の使用頻度が 3～5 倍に急増した。現在では、安らげる場所、自由な時間、たまり場、いきいきと過ごせる場所・時間等といった広い意味となっており、児童のみならず大学生から中高年、会社や地域まで幅広い枠組みを持った言葉として一般的に受け止められている。

従来義務教育では不登校の問題として居場所を捉えるのが主流であったが、大学生では、

学校不適応、特に休学や退学に至る背景という側面から居場所を捉えてきた。内田(2008)は、全国83の国立大学で休学者の約15%、退学者の約24%がスチューデント・アパシー(無気力)によると報告している。石本・倉澤(2009)は、大学生における居場所感が学校適応に一定の影響を与えていることを示し、石本(2010)でも、居場所感が高いほど心理的適応が高くなるという結果が示唆され、居場所感を感じる事が心理的適応ひいては学校適応に結びつくと結論づけている。このような居場所研究において、短大生は年齢的には大学1-2年生に相当するが、対象として小中高校生、中学生と大学生、高校生と大学生、大学生のみ、青年期として中高・専門・大学生、という枠組での調査がなされており、短大生のみを対象とした研究は見当たらない。短大は2年ないし3年という大学に比べて短い教育年数の中で、様々な資格を取得し、実習やインターンシップを経験して就職に繋げ、資格取得数や就職率といった短期間での成果が求められる。それ故に、学校適応にかかる猶予は大学に比べて短く、適応の有無が個人の成果に与える影響も大きいと思われる。入試全入時代となった今、休退学者が増える傾向も散見され、居場所として学校の位置づけが重要になっている。

本学でも、コミュニケーションの苦手な学生や少数ではあるが友人形成につまずく学生もあり、休退学や資格取得、卒業・就職に支障をきたす事態にもなっていることから、本年度学生支援の一環として、教室の集中する1号館にコミュニティールームをリニューアルし居場所形成に役立てようと試みた。その利用は必ずしも多いとは言えない状況であるが、学生にとっての居場所とは何かについて、本研究では短大生を対象に居場所感に関する調査を行うこととした。

II. 研究方法

1. 居場所研究の動向

居場所に関する研究は1990年代後半から心理学やその関連領域から増え、主に心理学的立場からの居場所についての考察、居場所作りの実践や事例、居場所に関する実証的研究へと拡大してきた。

居場所には個人的居場所と社会的居場所の2種類があるとされている。心理的適応との関連では、社会的居場所には関連が認められたものの個人的居場所には関連はなかったとする結果(石本2006)がある一方、個人的(プライベート)空間を大切にする傾向にある近年、一人でいられる場所を居場所と捉える人がいる事実もあり、居場所研究にはこのような居場所の捉え方に関する研究と、尺度を作成して居場所を測定する研究がある。居場所の捉え方に関する研究では、「あなたにとっての居場所はどこか」という質問に対する回答を求めた結果、自分の家・部屋・家族、学校、友人を挙げるが多かった。尺度を作成して居場所を測定する研究では、田中(2002)は一般的感情尺度を使用して「安堵

感」「充実感」「否定的感情」から成る居場所感尺度を作成し、則定（2008）は一緒にいるとホッとする他者との関係において「安心感」「被受容感」「本来感」「役割感」の4因子から成る居場所感尺度を作成し、居場所にいるときに得られる（あるいは居場所に求める）感情に着目している。これらの尺度は居場所での感情を捉えても、あくまで一人ひとりが思い描く居場所としての感情であり、具体的居場所を特定してはいない。

居場所の定義として「ありのままでいられる」「自分自身が受け入れられていると感じる」ことであるとされている。また、「自分の気持ちを素直に表現しても否定されない」「自分の役割が実感でき自己肯定感が取り戻せる」ところ（廣木 2005）ともされている。このような個人的感覚に加えて他者との関係において居場所を捉えた尺度として、石本（2009）はありのままでいられることを表す「本来感因子」6項目と自分が受け入れられ必要とされていることを表す「自己有用感因子」7項目の2因子13項目からなる尺度を作成し、先行研究で他者との関係性における居場所のうち、家族・友人・恋人・バイト・サークル以外に挙げられるものはなかったことから、家族・学内友人・学外友人・恋人の4つの具体的関係性ごとの居場所感を測定している。この尺度の信頼係数（ α ）は家族居場所感 0.85（自己有用感 0.86、本来感 0.83）、学内友人居場所感 0.86（自己有用感 0.90、本来感 0.86）、学外友人居場所感 0.91（自己有用感 0.91、本来感 0.90）、恋人居場所感 0.88（自己有用感 0.88、本来感 0.88）と各項目とも 0.80 以上の高い信頼性を得られており、累積寄与率は 59.5%、因子間相関 0.68 であった。さらに、関係性ごとの居場所感が直接的居場所と感じるかどうかについて質問項目を加え相関係数を算出した結果、0.64~0.70 とかなり相関があることを確認している。また、平石（1993）の自己肯定意識尺度を用いて自己受容・自己実現的態度・充実感の各下位尺度を従属変数として居場所感との関連を分析した結果、いずれも P 値 0.5~0.01 の有意差が認められ基準関連妥当性が確認できている。

その後、個人的居場所と社会的居場所を区別してそれぞれの居場所の保持の程度をはかる尺度（原田ら 2014）も作成されたが、本研究としては、石本の居場所感尺度（2010）を用いて他者との関係性における居場所および直接的居場所感について調査することが妥当と考えた。

2. 居場所感尺度

石本の居場所感尺度（2010）における家族・学内友人・学外友人・恋人4つの具体的関係性ごとの居場所感では、男性対象者が少ないと恋人との関係性において性差が示されており、アパシー・心理意欲低下尺度との関連では授業意欲低下に関して恋人との関係性は関連が認められたが、学業意欲・大学意欲の低下に関しては家族・学内友人、アパシー心理に関しては家族・学内友人・学外友人との関連が確認されたことから、短大の特性として2/3以上を女子が占めることから恋人を項目としてはずした。また、石本の関係性項

目では大学生を対象としてキャンパスも大きいことから、学外（学科外）友人としてサークル部活動とアルバイトを指しているが、先行研究の中で挙げられていたサークルや学内部活動を、学校への帰属意識の観点から関係性項目の一つ「（サークルや学内部活動の）仲間」として加え、本研究では家族・友人（学科やゼミの友人）・仲間（サークルや部活動の仲間）・外部（アルバイトや外部の人）の四つの関係性ごとの居場所感について、「自己有用感因子」7項目および「本来感因子」6項目の計13項目と、「〇〇が私の居場所だと感じる」という直接的居場所感1項目を合わせた14項目について、「当てはまらない（1点）」から「よく当てはまる（5点）」までの5件法で回答を求めた。さらに、著者らが考えた「自分の居場所と感ずる具体的場所や体験」のうち優先順位をつけて三つまで選んでもらうようにした。

（アンケート内容）

わたしが（家族・学科やゼミの友人・サークルや部活動の仲間・アルバイトや外部の人）といるとき

自己有用感	わたしは〇〇から関心を持たれている
	わたしがいないと、〇〇が寂しがる
	自分が必要とされていると感じる
	自分が役に立っていると感じる
	自分なりの役割があると感じる
	わたしがいないと、〇〇が困る
	自分の存在が認められていると感じる
本来感	これが自分だと実感できるものがある
	いつでも自分らしくいられる
	いつも自分を見失わないでいられる
	ありのままの自分が出せる
	自分のやりたいことをすることができる
いつでも揺るがない自分がそこに在る	
直接的居場所感	〇〇がわたしの居場所だと感じる
具体的居場所（3）	①新入生合宿 ②夏祭り ③大学祭 ④ISO活動 ⑤キャンプ ⑥ゼミ旅行 ⑦絆活動 ⑧食堂 ⑨学生ホール ⑩コミュニケーションルーム（コミュ庭） ⑪体育館 ⑫図書館 ⑬部室 ⑭トイレ ⑮教室 ⑯4号館（階） ⑰研究室 ⑱その他

3. 調査対象・期間と倫理的配慮

調査対象者は短大全体で314名（未来キャリア/総合ビジネス（以下、未来キャリア学科という）学科97名、子ども学科133名、健康福祉学科84名）で、有効回答数（率）は短大全体で256名（81.5%）、未来キャリア学科63名（64.9%）、子ども学科112名（84.2%）、健康福祉学科81名（96.4%）であった。

調査期間は平成26年7月29日～8月7日までの間、各学科・学年ごとに研究意図を説明し、記入をもって同意を得られたと考えその場で回収した。

尚、データの分析には spss17.0 バージョンを使用した。

Ⅲ. 調査結果及び考察

1. 短大生の居場所感

今回の分析対象数は男性 49 名 (19.1%)、女性 203 名 (79.3%)、不明 4 名 (1.6%) の合計 256 名、平均年齢 21.09 歳 (SD6.84) であった。学年は、1 年生 104 名 (40.6%)、2 年生 115 名 (44.9%)、3 年生 37 名 (14.5%) の構成であった。

居場所感尺度の質問構成に沿って、家族・友人・仲間・外部の 4 つの関係性ごとの居場所感について「自己有用感」「本来感」について短大全体・男女別平均値 (Table1)、直接的居場所感について回答ごとの短大全体・男女別数 (Table2)、短大全体の具体的居場所 (Table3) を以下に示す。

短大生全体の家族・友人・仲間・外部四つの関係性ごとの居場所感得点平均値は、石本 (2009) の大学生平均値 (家族 3.62、学内友人 3.28、学外友人 3.54) と比較してやや低く、外部 (アルバイトや地域の人) > 友人 (学科やゼミの友人) > 仲間 (サークルや部活動の仲間) となっていた。また、家族に対して全体の 6 割が居場所感を持っており、学内やサークルの友人仲間やアルバイト等の人に対しては約 3 割程度で、男女間での差はなかった。居場所感の心理発達的变化として、学年が上がるほど高く評価する (石本 2010) ことから大学生よりやや低い結果であることは妥当といえる。また、友人等の関係性では、大学

【Table1】短大全体・男女別関係性による居場所尺度構成得点 (平均値)

項目	n	全体 (SD)	n	男子 (SD)	n	女子 (SD)
家族居場所感	246	3.42 (.78)	47	3.43 (.86)	195	3.42 (.76)
家族自己有用感	250	3.37 (.84)	49	3.32 (.96)	197	3.38 (.81)
家族本来感	251	3.48 (.82)	47	3.58 (.90)	200	3.45 (.81)
家族直接的居場所感	255	3.69 (1.15)	48	3.56 (1.16)	203	3.72 (1.15)
友人居場所感	249	3.18 (.75)	46	3.06 (.82)	199	3.21 (.74)
友人自己有用感	252	3.10 (.78)	48	2.93 (.90)	200	3.15 (.75)
友人本来感	252	3.26 (.83)	47	3.20 (.89)	201	3.29 (.81)
友人直接的居場所感	255	3.09 (1.04)	49	2.92 (1.13)	202	3.11 (1.01)
仲間居場所感	168	3.06 (.87)	35	3.09 (.91)	131	3.06 (.84)
仲間自己有用感	169	3.03 (.87)	36	3.03 (.91)	131	3.04 (.85)
仲間本来感	170	3.11 (.91)	35	3.15 (.95)	133	3.11 (.89)
仲間直接的居場所感	171	3.05 (1.05)	36	3.25 (1.07)	133	2.99 (1.02)
外部居場所感	238	3.19 (.81)	44	3.31 (.88)	190	3.16 (.80)
外部自己有用感	239	3.21 (.81)	44	3.28 (.88)	191	3.19 (.80)
外部本来感	170	3.11 (.91)	35	3.15 (.95)	133	3.11 (.89)
外部直接的居場所感	241	3.09 (1.10)	45	3.24 (1.20)	192	3.05 (1.08)

* 部活動に入っていないと思われる者は未回答

【Table2】短大全体・男女別家族・友人・仲間・外部との直接的居場所感

家族がわたしの居場所だと感じる	全 体		男 性		女 性	
	度数	有効%	度数	有効%	度数	有効%
当てはまらない	17	6.7	4	8.3	13	6.4
あまり当てはまらない	18	7.1	2	4.2	15	7.4
どちらとも言えない	65	25.5	17	35.4	47	23.2
まあ当てはまる	83	32.5	13	27.1	69	34.0
よく当てはまる	72	28.2	12	25.0	59	29.1
合 計	255	100	48	100	203	100
友人がわたしの居場所だと感じる	度数	有効%	度数	有効%	度数	有効%
当てはまらない	24	9.4	9	18.4	15	7.4
あまり当てはまらない	33	12.9	3	6.1	29	14.4
どちらとも言えない	118	46.3	23	46.9	95	47.0
まあ当てはまる	57	22.4	11	22.4	44	21.8
よく当てはまる	23	9.0	3	6.1	19	9.4
合 計	255	100	49	100	202	100
仲間がわたしの居場所だと感じる	度数	有効%	度数	有効%	度数	有効%
当てはまらない	17	9.9	2	5.6	14	10.5
あまり当てはまらない	24	14.0	5	13.9	19	14.3
どちらとも言えない	80	46.8	17	47.2	63	47.4
まあ当てはまる	34	19.9	6	16.7	28	21.1
よく当てはまる	16	9.4	6	16.7	9	6.8
合 計	171	100	36	100	133	100
外部がわたしの居場所だと感じる	度数	有効%	度数	有効%	度数	有効%
当てはまらない	28	11.6	6	13.3	22	11.5
あまり当てはまらない	27	11.2	2	4.4	25	13.0
どちらとも言えない	107	44.4	20	44.4	83	43.2
まあ当てはまる	54	22.4	9	20.0	45	23.4
よく当てはまる	25	10.4	8	17.8	17	8.9
合 計	241	100	45	100	192	100

生の学外友人>学内友人となる傾向と同様な結果であった。ありのままでいられることを表す「本来感因子」と自分が受け入れられ必要とされていることを表す「自己有用感因子」とでは、アルバイトや外部の人との外部居場所感以外は本来感得点平均値の方が高く、ありのままの自然体で関係性を形成できていると感じていると推察される。

男女の得点平均値について、大学生対象の石本（2009）では家族・学外友人居場所感において有意な差があり、家族居場所感は女子学生の方が、学外友人では男子学生の方が高く評価しているという結果であった。今回男女それぞれの平均値の差の検定（T - Test）をおこなったが、特に差はなかった。また、家族・友人・仲間・外部の居場所感と直接的居場所感との相関係数は $r = .709^{**} \sim .811^{**}$ と高い相関を示し、居場所感尺度が直接的居場所感を反映している表れであると云える。

具体的居場所として一番目に挙げられたのは、多い順に①研究室②4号館③その他④教室⑤食堂、学生ホールであった。二番目として挙げられたのは、①4号館②教室、研究室

【Table3】短大全体の優先順位別居場所

全 体	居場所 1		居場所 2		居場所 3		合計 (延べ)
	度数	%	度数	%	度数	%	
新生合宿	3	2.1	1	0.9	5	5.3	9
夏祭り	9	6.3	1	0.9	1	1.1	11
大学祭	3	2.1	11	9.6	2	2.1	16
キャンプ	1	0.7	2	1.7	1	1.1	4
ゼミ旅行	1	0.7			3	3.2	4
ISO活動							0
絆活動	1	0.7	1	0.9	1	1.1	3
食堂	11	7.7	10	8.7	8	8.4	29
学生ホール	11	7.7	9	7.8	6	6.3	26
コミュ庭	3	2.1	1	0.9	4	4.2	8
体育館	1	0.7	5	4.3	3	3.2	9
図書館	20	14.0	15	13.0	14	14.7	49
部室	6	4.2	6	5.2	6	6.3	18
トイレ	4	2.8	3	2.6	7	7.4	14
教室	13	9.1	13	11.3	11	11.6	37
4号館	18	12.6	14	12.2	6	6.3	38
研究室	21	14.7	13	11.3	8	8.4	42
その他	17	11.9	10	8.7	9	9.5	36
合 計	143	100	115	100	95	100	353

図書館	研究室	4号館	教室	その他	食堂	学生ホール	部室	大学祭
49	42	38	37	36	29	26	18	16
トイレ	夏祭り	新生合宿	体育館	コミュ庭	キャンプ	ゼミ旅行	絆活動	ISO活動
14	11	9	9	8	4	4	3	0
								合計 (延べ)
								353

③大学祭④食堂、その他⑤学生ホールの順で、三番目には①図書館②教室③その他④研究室、食堂⑤トイレとなった。延べ数としては図書館が最も多く、次いで研究室、4号館であった。その他の内容では、家や自室、地元の友人や恋人を挙げた人が多かった。この質問では、いわゆる個人的な居場所として「ありのままにいられる」「自分が受け入れられ必要とされる」と個人が感じる具体的場所や体験を示してもらったことだった。そのほとんどは物理的場所を思い描いており、唯一、大学祭が体験的居場所として上位に挙がっていた。その意味で、物理的環境を整備することは居場所作りとして大切であることが分かる。授業として教室で多くの時間を割く中で、休み時間等に集う場所として研究室の位置づけが高いことがわかる。また、4号館の居場所感が比較的高く、二階を除く各階でフリースペースを備えている点が要因と考えられる。広い食堂や学生ホールの方が下位になったことから、広い空間よりも比較的小空間の方が居場所として位置付けやすく、好まれる傾向にあると思われる。尚、今回居場所としてはふさわしくないトイレという項目も入れてみたところ、中位の居場所としては挙がっていることは着目すべきではなかろうか。学期よりトイレを自分だけの空間として居心地良いと感じる傾向がみられており、短大生となっ

た現在なお、他者に対してありのままの自分を開けない、あるいは開くことのできる環境にないと感じる学生が、少なからず存在しているということをあらためて認識した。

さらに、性別・学年と具体的居場所との関係を見ると、性別では夏祭り*、大学祭***、学生ホール**、研究室*、体育館*に差が認められ（Mann-whitney の u 検定）、さらに順位との関連を検討すると、夏祭り*、大学祭**、学生ホール*、体育館*は男子学生に順位が高く、研究室*は女子学生に多い傾向があるものの明らかな順位の差はみられなかった（ χ^2 検定）。

学年では、大学祭*、食堂**、部室*に差が認められ（Kruskal Wallis 検定）、さらに順位との関連を検討すると、大学祭*は1年に比べて3年生に順位が高く、食堂*は2年に比べて1年生に順位が高く、研究室**は2年に比べて3年生が1位に選んでいた。なお、部室の学年での差はなかった（* = 5%、** = 1%、*** = 0.1%水準で有意）。

2. 学科別居場所感

次に、学科別に家族・友人・仲間・外部の関係性ごとの居場所尺度構成得点（Table4）、直接的居場所感結果（Table5）、順位別学科ごとの具体的居場所合計（Table6）を以下に示す。

居場所感得点と学科間の平均値の差の検定（一元配置分散分析）をおこなった結果、学科による差はなかった。

【Table4】学科別関係性による尺度構成得点（平均値）

項目	n	未来キャリア(SD)	n	子ども(SD)	n	健康福祉(SD)
家族居場所感	61	3.60 (.70)	108	3.36 (.84)	77	3.37 (.74)
家族自己有用感	61	3.55 (.76)	110	3.27 (.90)	79	3.37 (.80)
家族本来感	62	3.65 (.73)	110	3.45 (.89)	79	3.38 (.78)
家族直接的居場所感	63	3.86 (1.13)	111	3.55 (1.16)	81	3.74 (1.1)
友人居場所感	62	3.29 (.73)	108	3.18 (.75)	79	3.10 (.77)
友人自己有用感	62	3.25 (.70)	110	3.09 (.79)	80	3.00 (.82)
友人本来感	63	3.34 (.85)	109	3.27 (.82)	80	3.18 (.82)
友人直接的居場所感	63	3.24 (1.01)	111	2.98 (1.00)	81	3.11 (1.11)
仲間居場所感	50	3.21 (.97)	78	2.98 (.81)	40	3.04 (.84)
仲間自己有用感	50	3.18 (.98)	79	2.96 (.79)	40	2.97 (.88)
仲間本来感	50	3.24 (.98)	80	3.02 (.88)	40	3.12 (.87)
仲間直接的居場所感	50	3.14 (1.06)	81	2.96 (.98)	40	3.10 (1.19)
外部居場所感	59	3.30 (.82)	106	3.19 (.81)	73	3.09 (.79)
外部自己有用感	59	3.33 (.81)	107	3.21 (.81)	73	3.11 (.81)
外部本来感	50	3.24 (.98)	80	3.02 (.88)	40	3.12 (.87)
外部直接的居場所感	60	3.32 (1.03)	108	3.05 (1.08)	73	2.96 (1.16)

【Table5】学科別家族・学内・部活動・学外の直接的居場所感

家族がわたしの居場所だと感じる	全 体		男 性		女 性	
	度数	有効%	度数	有効%	度数	有効%
当てはまらない	4	6.3	7	6.3	6	7.4
あまり当てはまらない	2	3.2	13	11.7	3	3.7
どちらとも言えない	15	23.8	30	27.0	20	24.7
まあ当てはまる	20	31.7	34	30.6	29	35.8
よく当てはまる	22	34.9	27	24.3	23	28.4
合 計	63	100	111	100	81	100
友人がわたしの居場所だと感じる	度数	有効%	度数	有効%	度数	有効%
当てはまらない	4	6.3	10	9.0	10	12.3
あまり当てはまらない	7	11.1	20	18.0	6	7.4
どちらとも言えない	29	46.0	49	44.1	40	49.4
まあ当てはまる	16	25.4	26	23.4	15	18.5
よく当てはまる	7	11.1	6	5.4	10	12.3
合 計	63	100	111	100	81	100
仲間がわたしの居場所だと感じる	度数	有効%	度数	有効%	度数	有効%
当てはまらない	5	10.0	7	8.6	5	12.5
あまり当てはまらない	5	10.0	14	17.3	5	12.5
どちらとも言えない	23	46.0	40	49.4	17	42.5
まあ当てはまる	12	24.0	15	18.5	7	17.5
よく当てはまる	5	10.0	5	6.2	6	15.0
合 計	50	100	81	100	40	100
外部がわたしの居場所だと感じる	度数	有効%	度数	有効%	度数	有効%
当てはまらない	4	6.7	13	12.0	11	15.1
あまり当てはまらない	5	8.3	13	12.0	9	2.3
どちらとも言えない	27	45.0	47	43.5	33	45.2
まあ当てはまる	16	26.7	26	24.1	12	16.4
よく当てはまる	8	13.3	9	8.3	8	11.0
合 計	60	100	108	100	73	100

学科と具体的居場所との関係を見ると、絆活動*、体育館*、教室**、4号館***に差が認められ（Kruskal Wallis 検定）、さらに順位との関連を検討すると、教室*は子ども学科に比べて健康福祉学科で順位が高く、4号館**は未来キャリア学科や子ども学科に比べて健康福祉学科の順位が高く、絆活動と体育館は学科間での順位の差はなかった（ χ^2 検定）。なお、コミュ庭は学科間の差としては認められなかったが、順位との関連において有意差があり（ $p < 0.05$ ）、未来キャリア学科のみが一位に選んでいた（* = 5%、** = 1%、*** = 0.1%水準で有意）。

【Table6】 学科ごとの順位別居場所及び居場所合計

未来キャリア 学科	居場所 1		居場所 2		居場所 3		合計 (延べ)
	度数	%	度数	%	度数	%	
新入生合宿			1	5.3	1	5.9	2
夏祭り	2	7.7					2
大学祭	1	3.8					1
キャンプ							0
ゼミ旅行					1	5.9	1
絆活動							0
食堂	1	3.8	3	15.8	1	5.9	5
学生ホール	3	11.5	2	10.5	2	11.8	7
コミュ庭	3	11.5					3
体育館	4	15.4					4
図書館			4	21.1	5	29.4	9
部室			1	5.3			1
トイレ			1	5.3	1	5.9	2
教室	3	11.5	3	15.8	4	23.5	10
4号館							0
研究室	7	26.9	3	15.8	2	11.8	12
その他	2	7.7	1	5.3			3
合計	26	100	19	100	17	100	62

研究室	教室	図書館	学生ホール	食堂	コミュ庭	その他	新入生合宿
12	10	9	7	5	4	3	3
夏祭り	トイレ	大学祭	ゼミ旅行	部室	キャンプ	合計 (延べ)	
2	2	2	1	1	1	62	

子ども学科	居場所 1		居場所 2		居場所 3		合計 (延べ)
	度数	%	度数	%	度数	%	
新入生合宿.					3	7.5	3
夏祭り	4	6.3	1	2.0			5
大学祭			6	12.2	1	2.5	7
キャンプ	1	1.6	1	2.0	1	2.5	3
ゼミ旅行.							0
絆活動.							0
食堂	6	9.5	5	10.2	4	10.0	15
学生ホール	4	6.3	6	12.2	1	2.5	11
コミュ庭					2	5.0	2
体育館	1	1.6	4	8.2	3	7.5	8
図書館	9	14.3	5	10.2	6	15.0	20
部室	6	9.5	2	4.1	4	10.0	12
トイレ	3	4.8	1	2.0	4	10.0	8
教室	1	1.6	4	8.2	4	10.0	9
4号館	6	9.5	3	6.1			9
研究室	12	19.0	6	12.2	2	5.0	20
その他	10	15.9	5	10.2	5	12.5	20
合計	63	100	49	100	40	100	152

研究室	図書館	その他	食堂	部室	学生ホール	4号館	教室
20	20	20	15	12	11	9	9
トイレ	体育館	大学祭	夏祭り	キャンプ	新入生合宿	コミュ庭	合計 (延べ)
8	8	7	5	3	3	2	152

健康福祉学科	居場所 1		居場所 2		居場所 3		合計 (延べ)
	度数	%	度数	%	度数	%	
新入生合宿	3	5.6			1	2.6	4
夏祭り	3	5.6			1	2.6	4
大学祭	2	3.7	5	10.6	1	2.6	8
キャンプ			1	2.1			1
ゼミ旅行	1	1.9			2	5.3	3
絆活動	1	1.9	1	2.1	1	2.6	3
食堂	4	7.4	2	4.3	3	7.9	9
学生ホール	4	7.4	1	2.1	3	7.9	8
コミュ庭			1	2.1	2	5.3	3
体育館			1	2.1			1
図書館	7	13.0	6	12.8	3	7.9	16
部室			3	6.4	2	5.3	5
トイレ	1	1.9	1	2.1	2	5.3	4
教室	9	16.7	6	12.8	3	7.9	18
4号館	12	22.2	11	23.4	6	15.8	29
研究室	2	3.7	4	8.5	4	10.5	10
その他	5	9.3	4	8.5	4	10.5	13
合計	54	100	47	100	38	100	139

4号館	教室	図書館	その他	研究室	食堂	大学祭	学生ホール	部室
29	18	16	13	10	9	8	8	5
新入生合宿	夏祭り	トイレ	ゼミ旅行	絆活動	コミュ庭	キャンプ	体育館	合計 (延べ)
4	4	4	3	3	3	1	1	139

IV. 結 語

短大生全体の家族・友人・仲間・外部四つの関係性ごとの居場所感は大学生と比べても妥当な値かつ構成であった。アルバイトや外部の人と以外は本来感得点平均値の方が高く、ありのままの自然体で関係性を形成していると推察できる。家族に対して全体の6割が居場所感を持っており、学内外の人や仲間に対して約3割程度の居場所感を持ち、男女間での差はなかった。短大全体での具体的居場所のほとんどは物理的場所が挙げられ、唯一大学祭が体験的居場所として挙がっていた。そのため、居場所として物理的環境を整備することは大切であると考えられる。

具体的居場所に関して、全体数(延べ)で図書館が最も多く、次いで研究室、4号館であった。学科別では、1位：研究室・4号館、2位：教室・図書館となっており、短大の居場所の特徴として研究室の位置づけが高いことが確認され、4号館(学科ごとに階を示した)の居場所感も比較的高かったことから、研究室に近いフリースペースとしての居場所として位置付けられていると思われる。個人的居場所と社会的居場所の区別が十分でないという指摘(原田ら 2014)のとおり、今回の結果からも個人的スペースと集团的スペースが混在していると言えよう。しかし、研究室で卒業論文やレポートを書いたり、友人や先生と話したりという両面の使い方もあることから、必要性に応じて使いわけることので

きる居場所と言えるのではないだろうか。

性別・学年・学科との関連では、夏祭り、大学祭、学生ホール、体育館は男子学生に順位が高く、研究室は女子学生に多い傾向があった。大学祭は1年に比べ3年生に順位が高く、食堂は2年に比べ1年生に順位が高く、研究室は2年に比べ3年生が1位に選んでいた。教室、4号館は他学科に比べ健康福祉学科で順位が高かった。今年度当初コミュニティルーム（コミュ庭）をリニューアルしたが、未来キャリア学科のみが一位に選んでいたことから、未来キャリア学科の学生の居場所として位置付けられていると分かり、学科教員の研究室に近いフリースペースとして有効活用されていると思われた。

このような特徴を踏まえて、近年学友会活動におけるマンパワー不足を鑑み、夏祭りや大学祭等をより活性化していく工夫が求められる。また、学校への帰属意識を高めるとともに休退学をさらに減少させ、学内での居場所感を増やすために体験的居場所の位置づけを高める工夫が必要である。

なお今回、質問紙の回答として石本同様5件法を用いたが、「どちらとも言えない」の回答比率が高く、回答に対する戸惑いも感じられた。高校までは教室という守られた場所・指定された個人の机があったが、大学にはそれがないことから、その環境に十分適応できていない可能性も考えられる。学生は居場所を必要としているが場所がないのか、そもそも必要としないのかという点までは掴めておらず、今後の課題としたい。

【引用・参考文献】

- 飯田 沙依亜・甲村和三・舟橋厚他（2011）大学生の居場所に関する研究－居場所のなさに着目して－ 愛知工業大学研究報告第46号 49 - 55.
- 石本 雄真（2009）居場所概念の普及およびその研究と課題 神戸大学大学院人間発達環境研究科研究紀要3（1）、93 - 100.
- 石本雄真・倉澤知子（2009）心の居場所と大学生のアパシー傾向との関連 神戸大学大学院人間発達環境研究科研究紀要2（2）、227-232.
- 石本 雄真（2010）青年期の居場所感が心理的適応、学校適応に与える影響 発達心理学研究21（3）、278-286.
- 内田 千代子（2008）大学における休・退学、留年学生に関する調査 茨木大学保健管理センター「休・退学、留年学生調査」事務局
- 大久保 智生・青柳肇（2002）青年用適応感尺度作成の試み：居場所感の視点から 日本教育心理学会総会論文集（44）320.
- 田中 治彦（2002）子ども・若者の「居場所」の構想 更生保護53、6 - 11.
- 則定 百合子（2008）青年版心理的居場所感尺度の作成 日本教育心理学会総会論文集（49）、337.
- 原田 克己・滝脇 裕哉（2014）居場所概念の再構成と居場所尺度の作成 金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要第6号、119-134.
- 廣木 克行（2005）子どもの居場所をつくる 神戸大学発達科学部編集委員会編大学教育出版、平石 賢二（1993）青年期における自己意識の発達に関する研究（Ⅱ）重要な他者からの評価との関連 名古屋大学教育学部紀要40巻、99 - 125.
- 文部科学省報告書（1992）登校拒否（不登校）問題について－児童生徒の「心の居場所」作りを目指して（学校不適応対策調査研究協力者会議）